慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「人道主義」をめぐるトランスナショナル・ヒストリー : 両大戦間期の国際赤十字運動
Sub Title	Transnational history of humanitarianism : the international Red Cross movement during the interwar period
Author	舘, 葉月(Tate, Hazuki)
Publisher	
Publication year	2024
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究においては、両大戦間期の国際赤十字運動の進展と国際人道法が整備される過程を検証し、「人道主義」が国際社会における主要な規範となり、それに基づく様々な活動が活発化する過程と、その限界・阻害要因を明らかにした。赤十字運動創設の契機となったアンリ・デュナンの『ソルフェリーノの思い出』の受容を感情史および法制史の側面から検証することで、人道主義が19世紀後半から20世紀前半にいかに定着したのかを論じた。また、第一次世界大戦に由来するさまざまな人道危機への対応をめぐり、人道主義がいかに実践されたのか、そしてその都度の経験がその後の時代にどのように反省・反映されたのかを検討した。 In this study, I examined the development of the international Red Cross movement and the evolution of international humanitarian law in the modern world, and clarified the process by which "humanitarianism" became a major norm in the international community and various activities based on it became active, as well as the limitations and impediments to such activities. By examining the reception of Henry Dunant's "Memoirs of Solferino," which triggered the founding of the Red Cross movement, from the aspects of emotional and legal history, I discussed how humanitarianism took root in the late 19th and early 20th centuries. I also examined how humanitarianism was put into practice in response to the various humanitarian crises stemming from World War I, and how the experiences of each case were reflected and reflected upon in subsequent periods.
Notes	研究種目 : 若手研究 研究期間 : 2020 ~ 2023 課題番号 : 20K13224 研究分野 : 歴史学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_20K13224seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３２２４

研究課題名（和文）「人道主義」をめぐるトランスナショナル・ヒストリー―両大戦間期の国際赤十字運動

研究課題名（英文）Transnational history of humanitarianism: the international Red Cross movement during the interwar period

研究代表者
舘　葉月（Tate, Hazuki）

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：５０８０３１０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究においては、両大戦間期の国際赤十字運動の進展と国際人道法が整備される過程を検証し、「人道主義」が国際社会における主要な規範となり、それに基づく様々な活動が活発化する過程と、その限界・阻害要因を明らかにした。赤十字運動創設の契機となったアンリ・デュナンの『ソルフェリーノの思い出』の受容を感情史および法制史の側面から検証することで、人道主義が19世紀後半から20世紀前半にいかに定着したのかを論じた。また、第一次世界大戦に由来するさまざまな人道危機への対応をめぐり、人道主義がいかに実践されたのか、そしてその都度の経験がその後の時代にどのように反省・反映されたのかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、トランスナショナル・ヒストリーの手法ならびに感情史的アプローチという、従来の国家主体の国際関係史を刷新する方法論を採用している点で、学術的意義が認められる。すなわち、多様なアクター（諸国家、諸組織、とりわけ個人）によって構成され、それぞれが不均衡で流動的な関係性を結び、そのダイナミズムの中で「人道主義」という規範が成立・維持・変質する場としての国際社会の在り方を示そうと試みた。また、「人道主義」の歴史を主題に据える本研究は、国際社会の一員としてグローバル・イシューの解決のために積極的に取り組むことが求められる現代の日本に示唆を与えるという意味で、社会的意義があるものと考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined the development of the international Red Cross movement and the evolution of international humanitarian law in the modern world, and clarified the process by which "humanitarianism" became a major norm in the international community and various activities based on it became active, as well as the limitations and impediments to such activities. By examining the reception of Henry Dunant's "Memoirs of Solferino," which triggered the founding of the Red Cross movement, from the aspects of emotional and legal history, I discussed how humanitarianism took root in the late 19th and early 20th centuries. I also examined how humanitarianism was put into practice in response to the various humanitarian crises stemming from World War I, and how the experiences of each case were reflected and reflected upon in subsequent periods.

研究分野：歴史学

キーワード：赤十字国際委員会　国際赤十字・赤新月運動　第一次世界大戦　国際人道法　感情史　戦争捕虜　アンリ・デュナン　ギュスタヴ・モワニエ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

地球規模での取り組みが求められる環境･人権･紛争等に関わる諸問題が累積する現代世界で、「人道主義 humanitarianism （苦境にある他者に手を差し伸べ、その苦しみを軽減しようとする考え）」に基づく活動のアクターは、ローカルあるいはグローバルな NGO 組織から各国政府や国際組織まで多岐に渡る。「人道主義」は今日の国際社会の主要な規範となっていると言えるが（Mark Mazower, *Governing the World*, Penguin Group, 2012）、他方で、その介入的性格や活動の中立性・不偏性への疑義など、批判的視線も向けられている。また、「人道主義」の普遍的性格が無批判に了解される傾向があるがゆえに様々な背景をもつ極めて広範な活動が一様に「人道主義」的活動として理解されることは、各々の特質や個別の問題点が捨象される危険性がある。いかにして「人道主義」が国際社会を構成する一要素となり、その射程がどのように変化してきたのかを巨視的かつ批判的に考察すると同時に、「人道主義」の元で一括りにされる活動・問題群を、歴史学の視座から個別具体的に検証する必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、両大戦間期の国際赤十字運動の進展と国際人道法が整備される過程を検証し、「人道主義」が国際社会における主要な規範となり、それに基づく様々な活動が活発化する過程と、その限界・阻害要因を明らかにすることである。「人道主義」概念の整理、国際赤十字運動の組織化と国際法締結準備のプロセス、 人道問題をめぐる感情の動員と制御の分析を、目的達成のための具体的な課題として設定する。本研究は、複合的な史料分析に基づく実証研究であると同時に、脱国境的ネットワークと知の循環を重視するトランスナショナル・ヒストリーの手法を採用し、従来の国際関係史に新しい視座を提供することを目指した。また、感情史的アプローチを取り入れることで、国際政治との関連で巨視的視点から論じられがちな人道活動史に、微視的視点と個人の主体性という分析視角を導入している。

３．研究の方法

両大戦間期の国際赤十字運動が、その「人道主義」的目的のために、いかに組織化と専門化を推進し、他の人道アクターと関係・ネットワークを結び、国際社会にいかなる「人道主義」をいかに根付かせたのか、また、どのような点に限界があったのかを明らかにするために、以下の 3 つの課題を設定し、文献調査、史料分析とフィールドワークを通じて、研究を進めた。

課題①　「人道主義」概念の整理

「人道主義」は、当該概念に基づく理念や活動の射程の広さから、地域・時代に応じ様々な意味を付与されてきた。その結果、幅広い学問分野の研究対象となる一方で、その歴史的展開の全体像は曖昧なままにされてきた。本研究では、「人道主義」あるいは慈善・博愛などの近接概念によって説明されてきた諸活動及びその性質を理解するために、近現代の人道活動を対象とした関連研究を幅広く見通すことによって、研究史の整理をおこなった。また、赤十字運動創設者であるアンリ・デュナン（1828-1910）およびギュスタヴ・モワニエ（1826-1910）の著作、モワニエを継いだ総裁ギュスタヴ・アドール（1845-1928）の書簡、そして初の女性委員となった歴史家で方が学博士でもあるマルグリット・クラメール（1887-1963）の論文を精読し、彼らの考える人道主義赤十字の在り方を時代の文脈に位置づけながら整理した。それによって、赤十字運動創設時におけるその活動の射程、および両大戦間期にいたるまでのその変化を分析した。

課題②　人道活動のトランスナショナル・ヒストリー：組織化と法制化に着目して

第一次世界大戦後、赤十字国際委員会は、各国赤十字社との関係強化の必要性や他組織との競合を背景に、赤十字国際会議の頻繁な開催や赤十字規約の制定（1928 年）など、運動の一体化・組織化を進めた。さらに、人道活動をより円滑に行うために国際法の整備を目指した。本研究では、頓挫した計画や法案も含め、赤十字運動の組織化と国際法整備の過程を検証し、課題１で取り組んだ赤十字運動における「人道主義」が国際社会でいかに受け入れられたか（あるいは、受け入れられなかったか）を具体的に示すために、第一次世界大戦期およびその後にどのような人道危機が生じたか、それに対して赤十字運動はどのような形で対応することができたか（あるいはできなかったか）を、赤十字国際委員会と国際連盟の史料を用いて、分析した。

課題③　人道問題をめぐる感情の動員と制御の分析

感情史の観点から国際赤十字運動を考察することが、本研究の第三の課題であった。人道活動

は国際関係・外交・政治との関連の中で論じられることが多く、個々の人道アクターの動機付けや感情の次元は看過されてきた。しかし、近年研究が加速度的に進展している感情史の分析概念は「人道主義」と親和性が高い。すなわち、人道アクターの感情的経験とその赤十字運動全体への影響についての分析を通じ、人道活動における「感情規範 emotional regime」と個人の「感情発露の仕方 emotives」を論じること、また国際社会や各国社会で人道問題への関心を高めるため感情がいかなる方法で動員されたかを「感情の共同体 emotional communities」という視角から検討することは、「人道主義」の多角的解明に寄与すると考えた。本課題では、まずこのような感情史の方法論の理解を精緻にすると同時に、赤十字運動の発展に寄与した赤十字国際委員会の主要人物（課題１参照）の著作を通じて、この課題に接近することを試みた。

４．研究成果

研究初年度である 2020 年度以降、コロナ禍のために、計画していた海外でのシンポジウム報告や資料調査を 2022 年度まで実施できなかった。したがって、2020 年度から 2022 年度までは、手元にある史料の読み込み、研究文献の整理、デジタル・アーカイブの活用をつうじて研究活動を行った。また、コロナ禍以降、オンライン学会が定着したこともあり、積極的にそのような機会を活用するようにしたが、国際学会での成果報告は実施できなかった。しかし、2022 年度以降は、国内の学会・研究会において年に 2 回ほど研究成果の報告を行い、2024 年度は本科研に関連するテーマの国際シンポジウムで報告予定である。

また、最終年度である 2023 年度はヨーロッパでの資料調査およびフィールドワークを 2 回実施することができた。8 月の 4 週間の滞在では、フランス国立図書館において課題①にかかわる研究書や同時代出版物を網羅的に閲覧するとともに、近年開館ないし改装したベルギーおよびジュネーヴの複数博物館で、歴史上の人道的危機がどのように展示されているかを視察した。2 月の 2 週間のパリとジュネーヴの滞在では、課題②にかかわるジュネーヴ国際開発高等研究院文書館所蔵の国際法学会文書を閲覧するとともに、国際関係史・人道主義を専門とする複数の研究者と意見交換することができた。

課題①に関する成果

本科研での研究を通じ、歴史学における人道活動研究の主要な視角は、以下の 5 つに分類できると考えている。すなわち、１、個々の人道危機に関する研究の中での人道活動組織の役割の分析、２、複合的人道危機に関する研究の中での人道活動組織の役割の分析、３、人道活動組織の活動とその変化に関する個別研究、４、人道主義の活動史と概念史双方にまたがる研究（とりわけ近代的人道主義の始まりをめぐる議論）、５、植民地主義との関連の中での人道主義の研究、である。また、これまでの人道史研究の整理においては、マイケル・バーネット（Michael N. Barnett, *Empire of Humanity: A History of Humanitarianism*, Ithaca/ London, Cornell University Press, 2011）が提唱した緊急人道援助（戦争や自然災害など）と長期的な人道援助（開発援助など）の区分が用いられることが多かったが、ヨハネス・パウルマン（Johannes Paulmann (ed.), *Dilemmas of Humanitarian Aid in the Twentieth Century*, Oxford, Oxford University Press, 2016）などはこの二分法を冷戦期の開発援助の文脈に強い影響を受けたものであり、歴史研究はより具体的に多様性に富むものとして人道援助の在り方を検討すべきだと批判している。本研究も、パウルマンの見解に賛同するものであり、それを踏まえた研究動向に関する論文を執筆するつもりである。

また、事典（2022）および大学生向け教科書（2024 脱稿）で「国際赤十字・赤新月運動」の項目を担当し、赤十字国際委員会の活動を運動全体や国際関係史の中に位置づけた。各国赤十字社が時間の経過とともに医療や公衆衛生、社会福祉といった分野での活動（平時事業）の比重を高めていったのに対し、赤十字国際委員会は一貫して戦時事業を活動の中核に据えてきた。その背景には、中立原則に基づく自身の立場の有効利用によって人道活動に貢献するという側面とともに、国際社会において、また、増加する国際人道団体との競合の中で、自身の立ち位置を確保する戦略的側面も確認できる。赤十字国際委員会の中立姿勢については、2020 年の論文でも扱い（「中立勢力による戦時の人道活動―第一次世界大戦期のスイスと赤十字国際委員会に着目して」）、2024 年には中立概念をテーマに据えた国際シンポジウムでも同組織の中立原則の実践の在り方について報告予定である。

課題②に関する成果

課題②については、第一次世界大戦とその後について、いくつかの人道危機、そして、状況によってはそれが複合的に生じる中で、赤十字国際委員会がどのような活動を展開したか、その経験を組織の発展や国際法の整備のためにどのように生かしたかを検証した。

扱った人道危機としては、第一次世界大戦期の北フランス占領（2022 年分担執筆「子どもたちが記憶する第一次世界大戦―北フランスの占領とその後」）、戦争捕虜の帰還事業（2022 年分担執筆“Internment after the War's End: "Humanitarian Camps" in the POW Repatriation Process, 1918-

1923”）などである。さらに、複合危機として、大戦後の中東欧に赤十字国際委員会より派遣された派遣団の活動を検証することで、戦時から平時に移行するプロセスで、赤十字運動が対峙した組織運営上の困難や新たな人道危機を明らかにし、それが両大戦間期の運動の在り方をどのように規定したかを検討した（2022 年論文「連鎖する人道危機—第一次世界大戦後のヨーロッパと赤十字運動」）。また、捕虜帰還事業を扱った博士論文（2015 年）にこれらの成果を加えて大幅に修正した原稿が、フランスの出版社に受理されたため、2025 年度までには刊行される予定である。

課題③に関する成果

感情史の方法論を理解するために、『感情史とは何か』（バーバラ・ローゼンワイン・リッカルド・クリスティアーニ著、岩波出版社、2021 年）の翻訳に参加した。また、個別研究としては、赤十字運動創設者であるアンリ・デュナンおよびギュスタヴ・モワニエの著作の検討を行った。感情史研究においては、ある程度長期的な感情の体制や共同体の変化を見ていく必要があるため、赤十字国際委員会の活動を例に人道的感情の歴史的変遷を検証するためには 19 世紀半ばの草創期から扱うべきだと判断したからである。本研究では、赤十字がその運動を展開するにあたり、いかなる形で、どのような感情の動員を、いかなる人々を対象に行ったかに関しての議論を長期的スパンで確認・分析することを目指したが、この科研採択中に成果として公表できたのは 19 世紀半ばの草創期の事例のみである。ベストセラーとなったデュナン『ソルフェリーノの思い出』を読み直すことで、本書がいかに短期間に人道的感情を喚起することに成功したのかを、そのナラティヴの構成および 19 世紀の博愛主義的･改良主義的時代背景から分析した。さらに、赤十字運動が産声を上げた 1860 年代と、複数の戦争の試練を経た 70 年代以降の人道的感情をめぐる ICRC の言説を比較すると、人道的感情を喚起することでまずは運動を軌道に乗せようとする姿勢から、運動の組織化と国際法の発展のそれぞれにおいて異なる性質の感情を動員する方向へと、モワニエの議論の洗練がみてとれることが明らかになった（2023 年分担執筆「「人道的感情」の描かれ方——赤十字運動のふたりの創設者の言説に着目して」）。2024 年 1 月には、以上の成果のデュナンに関する部分をさらに発展させる形で、文学研究者主体のシンポジウム「感情とリアリズム—文学と歴史学の対話」に登壇し、アンリ・デュナンの著作『ソルフェリーノの思い出』がもたらした反響について領域横断的に論じる場を得た。これ以降の時代に関する感情史からのアプローチは今後の課題にしたいと考えている。

総括

研究期間全体をつうじて、①②③それぞれの課題を進め、毎年継続して研究成果を発表することができた。しかしながら、在外調査の実施が遅れたため、2023 年度の調査を反映させた研究についてはまだ十分に成果報告できていない。ただし、分担執筆や国際シンポジウムの報告の形ですでに公表の場が決まっているものがいくつかある。また、今回の課題①②③の成果を総合し、国際赤十字運動の進展と国際人道法の整備の過程を連関的に論じる研究書を執筆することを今後の課題と考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 舘葉月	４．巻 13
２．論文標題 「連鎖する人道危機―第一次世界大戦後のヨーロッパと赤十字運動」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『上智ヨーロッパ研究』	６．最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 舘葉月	４．巻 272
２．論文標題 書評「タラ・ザーラ著『失われた子どもたち―第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建』（三時眞貴子・北村陽子・岩下誠・江口布由子訳、みすず書房、2019年）」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『西洋史学』	６．最初と最後の頁 91-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 舘葉月	４．巻 997
２．論文標題 考古学からみえる第一次世界大戦―フランス北東部の経験と記憶	５．発行年 2020年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 35－47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 舘葉月	４．巻 844
２．論文標題 中立勢力による戦時の人道活動―第一次世界大戦期のスイスと赤十字国際委員会に着目して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 16－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 舘葉月	４．巻 129－5
２．論文標題 回顧と展望 現代フランス	５．発行年 2020年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 373－377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 舘葉月	４．巻 51
２．論文標題 書評「大津留厚著『さまよえるハプスブルクー捕虜たちが見た帝国の崩壊』」	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『九州歴史科学』	６．最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 舘葉月
２．発表標題 書評：大津留厚『さまよえるハプスブルク：捕虜たちが見た帝国の崩壊』（岩波書店、2021年）
３．学会等名 東欧史研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 舘葉月
２．発表標題 コメント：両大戦間期フランスの歴史学界―危機と刷新
３．学会等名 歴史学研究会創立90周年記念シンポジウム「「戦前歴史学」のアリーナ―1932：歴研が生まれた頃―」
４．発表年 2022年

１．発表者名
舘葉月

２．発表標題
国際人道活動のジレンマ ―第一次世界大戦後の赤十字国際委員会による東部戦線捕虜の帰還事業をとおして―

３．学会等名
2023年度西洋史読書会大会（京都大学）

４．発表年
2023年

１．発表者名
舘葉月

２．発表標題
赤十字運動創設者のリアリズムと感情喚起ーアンリ・デュナン『ソルフェリーノの思い出』(1862)を読む

３．学会等名
リアリズム文学研究会第 6 回シンポジウム「感情とリアリズム―文学と歴史学の対話」

４．発表年
2024年

〔図書〕　計6件

１．著者名	４．発行年
Hazuki Tate	2022年
２．出版社	５．総ページ数
Cornell University Press	336
３．書名	
10. Internment after the War's End: "Humanitarian Camps" in the POW Repatriation Process, 1918-1923, in Rotem Kowner, Iris Rachamimov (eds), Out of Line, Out of Place: A Global and Local History of World War I Internments	

１．著者名	４．発行年
舘葉月	2022年
２．出版社	５．総ページ数
丸善出版	836
３．書名	
事典項目「国際赤十字・赤新月運動」：日本医史学会『医学史事典』	

1．著者名 小森謙一郎・戸塚学・北村紗衣編	4．発行年 2022年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 319
3．書名 『人文学のレッスン』（分担執筆「子どもたちが記憶する第一次世界大戦―北フランスの占領とその後」）	

1．著者名 バーバラ・H. ローゼンワイン、リッカルド・クリスティアーニ、伊東 剛史、森田 直子、小田原 琳、舘 葉月	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 258
3．書名 『感情史とは何か』	

1．著者名 舘葉月	4．発行年 2023年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 256
3．書名 「両大戦間期フランス歴史学界における危機と刷新―Ｌ・フェーヴルの視点から」（歴史学研究会・加藤陽子編『「戦前歴史学」のアリーナー歴史家たちの一九三〇年代 』）	

1．著者名 舘葉月	4．発行年 2023年
2．出版社 平凡社	5．総ページ数 376
3．書名 「「人道的感情」の描かれ方―赤十字運動のふたりの創設者の言説に着目して」（伊東剛史・森田直子編『共感の共同体 ： 感情史の世界をひらく』）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関